日本赤十字九州国際看護大学/Japanese Red Cross Kyushu International College of Nursing

How the frequency of conversation between junior high school students and their parents/teachers is related to the students' knowledge, awareness and behavior regarding dating and sexually transmitted diseases

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-09-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: NAGAMATSU, Miyuki メールアドレス: 所属:
URL	https://jrckicn.repo.nii.ac.jp/records/619

原 著

中学生男女の親・教員との会話と男女交際および性感染症に関する知識・意識・行動との関連

How the frequency of conversation between junior high school students and their parents/teachers is related to the students' knowledge, awareness and behavior regarding dating and sexually transmitted diseases

原 健一[1)] 永松 美雪[2)] 中河 亜希[2)] 齋藤ひさ子[2)]

1) 佐賀県DV総合対策センター，2) 佐賀大学医学部看護学科母子看護学講座

1) Kenichi HARA : Saga Prefectural DV Prevention Center, 2) Miyuki NAGAMATSU, Aki NAKAGAWA, Hisako SAITO : Department of Maternal and Child Nursing, Faculty of Medicine, Saga University

抄 録：本研究は，中学生男女の親・教員の会話と，男女交際および性感染症に関係する知識・意識・行動の関連を検討することを目的とした。平成20年度から開始した佐賀県予防教育事業に，21年度から新たに参加した中学校のうち学校長の研究承認が得られた8中学校に調査を行った。2－3年生1746人の保護者へ説明書・同意書を配布し，保護者の同意および本人の同意が得られた生徒に実施した。調査期間は21年5月～7月である。調査内容は，親との会話の頻度，教員との会話の頻度，男女交際中の暴力認知，男女交際の意識，性感染症の知識，性行為の意識，危険行動である。佐賀大学倫理委員会の承認を得て，佐賀県予防教育事業の事前調査として実施した。調査を完了した1541人（回答率88.2％）の結果を分析した。男子は817人（53.0％），女子は724人（47.0％）であった。家族や中学校の教員との会話の頻度は，すべての項目で女子より男子が少なかった。男女交際において「男女の対等な関係」，「相手を思いやること」，「自分を思いやること」を大切であるという意識は，女子より男子が有意に低かった。男女交際中の暴力のうち精神的暴力は，女子より男子が暴力としてとらえていなかった。性行為を容認する意識は，女子より男子が有意に高かった。エイズの知識合計点と性行為経験者数は男女で有意な差を認めなかった。また，中学生男女の親・教員の会話と男女交際および性感染症に関係する知識・意識・行動に関連があることが示された。危険行動予防のために，親や教員との会話を増やすことが重要であることが示唆された。

Synopsis: The objective of this study is to examine how the frequency of conversation between junior high school students and their parents/teachers is related to the students' knowledge, awareness and behavior regarding dating and sexually transmitted diseases. Saga prefecture initiated a preventive education program in 2008. The study was conducted for 8 junior high schools, which joined the program in the following year, with the consent of their principals. At first information about the study and the consent form were given to the parents/guardians of 1,746 students in the 2nd and 3rd grades. The study was implemented only for those whose parents/guardians consented to the objective, so did the students themselves. The study period was from May to July, 2009.

The questionnaire items were the frequency of conversation with parents, frequency of conversation with teachers, recognition of violence during dating, awareness about dating, knowledge about sexually transmitted diseases, awareness of sexual intercourse, and risky behavior. This study was conducted as a preliminary survey for the Saga Prefectural Preventive Education Program as approved by the Ethical Committee of Saga University. Results were obtained from 1,541 subjects (response rate: 88.2%) who completed the

questionnaire. The subjects included 817 males (53.0%) and 724 females (47.0%). The frequency of conversation with family members or school teachers was lower in the male group than in the female group. In terms of importance of "equal partnership between both sexes," "consideration for others," and "consideration for oneself" during dating, males' awareness was significantly lower than females'. The percentage of subjects who regarded verbal assault as violence was lower in the male group than in the female group. The percentage of subjects who approved junior high school students to have sexual intercourse was significantly higher in the male group than in the female group.
There were no significant difference by sex concerning the total score of knowledge about sexually transmitted diseases as well as the number of subjects with sexual experience. Further, the study showed that the subjects' knowledge, awareness and behavior regarding dating and sexually transmitted diseases were related with frequency of conversation with their parents/teachers. These results suggested that for the prevention of risky behavior junior high school students should be taught about the importance of having frequent conversation with their parents and teachers
Key Words: Frequency of conversation, Dating, Violence, Prevention

I. 緒 言

思春期の若者は，いろいろな環境の影響を受けながら発達している。発達とともに，アルコール・タバコ，精神的不適応・自殺，反社会的行動，性行為，暴力などにより，さまざまな健康問題を生じる可能性にさらされている[1]。日本性教育協会による10代の性交経験率の調査結果は，中学生で，男子3.6%，女子4.2%から，高校生で男子26.6%，女子30.0%と増加を示している[2]。10代の性交開始によって，望まない妊娠・人工妊娠中絶，ヒト免疫不全ウイルス（HIV）を含む性感染症などの危険性にいたる[3][4]。また，性的な関係にいたった親密な交際によって，男女間のトラブルや暴力を生じやすくなる[5]。2001年に施行された「配偶者からの暴力の防止および被害者の保護に関する法律」Domestic Violence（以下，DV）防止法は，2004年に，暴力の定義として「暴力とは，身体的暴力のみならず，心身に有害な影響を与える言動等」と改正され，精神的暴力と性的暴力もDVであると解釈されている。性的暴力については「性行為の強要，避妊に協力しない，出産・中絶の強要，性病を隠して性行為をする」等があり，女性の望まない妊娠や性感染症罹患の可能性が高まるという問題に繋がり，DVについて社会的な関心が高まってきている[6]。最近では，DVという用語は家庭内暴力の狭義を超えて，親密な関係性に起こる暴力としての概念が形成され，結婚前の恋人間，またはデートをしているなかで起こった暴力としてDating DV（以下，デートDV）の問題が取り上げられてきている[7]。しかし，日本では，婚前のデートDVの場合，DV法が定める保護命令の適応外であるなど対策が十分でないという問題がある[7]。

海外では，交際がはじまる思春期の対象に，デートDVに関する調査が行われ，被害者や加害者として思春期の男女がデートDVに巻き込まれていることが明らかとなり，被害者となり得る危険性は，男子より女子の方が高いと報告されている[8]。わが国の内閣府の一般成人を対象にしたデートDVの調査によると，交際相手からの暴力を経験した女性は13.6％，男性は4.3％と報告され，男子より女子が暴力の被害を受けていることが明らかとなった[8]。わが国の思春期を対象にしたデートDVに関する調査報告はまだ少ないが，大学生を対象とした調査によると，身体的暴力・精神的暴力・性的暴力の具体的な例を提示した後に，調査を実施すると，男性17.8％，女性16.7％に加害経験があるという報告がある[5]。女子大学生・高校生を対象としたNPO法人DVながさきの調査によると，女子大学生の14％，女子高校生の10％が被害の経験があり，そのうち30％は，性的なことを強制されたことがあると報告されている[9]。日本の最近の研究から，良好な親子関係がもてずに親の養育態度から愛情を得られずに，自分をコントロールされたととらえている者は，異性

との対等な関係を築きにくい傾向が認められた[10]。

また，海外の研究結果から親の養育態度のうち親子の性的な会話は，10代の性行動の開始や避妊行動に関連があることが明らかになってきている[11-13]。しかし，日本において，中学生の親を対象に，親子の性に関する会話についての調査により，親子の日常会話は「よく話す」が63.2%であったが，性に関する会話は「よく話す」4.8%と顕著に少ないことを報告している[14]。さらに，日本の文化において10代の性行動について議論することが否定的であることが土台にあり，学校や親は，学校外から調査をすることに抵抗があるため，日本において10代の性行動と親子の会話についての関連を調査した研究や親が家庭で行う性教育に関する研究は少ない[15,16]。ある日本の高校生に行った調査結果は，親子関係の中で16歳までの親子の会話に関する結果として，親とエイズ以外の性感染症や避妊についての会話については性行動を遅らせることに関係しなかったが，親とエイズについての会話をもつことや，親が10代の性行動の不賛成を子どもに示すことが10代の性行動開始を遅らせることを報告している[17]。日本において，親や教員とエイズについての話題を話す取り組みの結果，親子で性的な話題を行うことに抵抗がある日本の文化的背景から，親とのエイズの会話頻度を増やすことが困難であった。しかし，教員とのエイズの会話頻度を増加させ知識や意識を改善させたと報告している[18]。一方，他の研究で親と話題に関係なく，より会話頻度が多い若者は，セルフ・エスティームが高く，男女交際に対して慎重な態度を示しているという研究結果がある[19]。また，セルフ・エスティームを改善することを目的としたクラスの生徒は，他のクラスの生徒に比べて性行動を遅らせたという報告がある[20]。さらに，日本の注目する研究として，自分の意見を聞いてくれる人が身近にいると答えた生徒は，そうでない生徒よりセルフ・エスティームが高いという報告がある[21]。これらの研究から，セルフ・エスティームを高める会話やかかわりが子どもに影響している可能性が示唆される。

性交経験率が5％未満と性行動を開始している生徒が少ない中学生に，性行動に伴う望まない妊娠，性感染症，デートDVなどの危険を予防するための有効なプログラム作成が必要である。そのために日本の親や教員は，思春期の対象とどのような会話やかかわりが必要であるか検討することは重要であると考える。本研究は，①親・教員が生徒と話題に関係なく日常会話をすること，②「命の大切さ」や「健康の大切さ」の話題を話すこと，③生徒の意見を聞くことと生徒の男女交際および性感染症に関する知識・意識・行動との関連を明らかにすることを目的とした。

Ⅱ．方　法

1．調査対象

本研究における参加者は，平成20年度から開始している佐賀県予防教育事業（性行動に伴う危険を予防する中学生向けプログラム：1年生「命の大切さ/望まない妊娠予防」2年生「男女交際中の暴力予防」3年生「エイズ予防」）に，21年度から新たに参加した中学校のうち学校長の研究承認が得られた8中学校の生徒に調査を行った。そのうち2･3年生 1746人の保護者へ説明書・同意書を配布し，保護者の同意および本人の同意が得られた生徒のうち実施前の調査に参加した生徒を研究対象とした。

2．調査期間と調査方法

研究期間は21年5月から21年7月までである。研究を実施する前に，教員へ調査手順方法を記載した説明書を渡した。それには，親への研究説明書・同意書の配布・回収方法と，生徒への研究説明書・同意書・調査票の配布・回収方法を記載した。研究説明書には，研究の目的，データの守秘性，参加を拒否できること，研究者の連絡先を詳細に記載した。生徒の調査前に，教員から生徒を通じて，親へ研究説明書と同意書を渡すように依頼した。親が記載した同意書は，生徒を通じて担任教員に提出された。親がいない生徒の場合，保護者（生徒を養育している成人）の同意を得た。さらに，生徒の同意が得られた場合に調査は実施された。本研究計画は，佐賀大学医学部倫理委員会に提出して研究承認を得て実施した。

3. 調査内容

(1) 親との会話頻度

独自に作成した4項目の質問票を使用した。

① この3カ月間，保護者と話しましたか？（以下，日常会話）

② この3カ月間，保護者と「命の大切さ」について話しましたか

③ この3カ月間，保護者と「健康の大切さ」について話しましたか？

④ この3カ月間，保護者はあなたの意見を聞いてくれましたか？

会話の頻度を1＝まったく話さない（または聞かない），2＝ほとんど話さない，3＝たまに話す，4＝よく話す，から選択する。会話頻度が多くなるほど，点数を高く設定している。

(2) 教員との会話頻度

保護者の会話頻度の質問項目を中学校の教員に置き換えて同様の内容を尋ねた。

(3) 男女交際中の暴力認知

内閣府の調査により「デートDV」に当たる身体的暴力，精神的暴力，性的暴力の内容をもとに[8]，研究者により80高等学校の19398人の高校生による教育前後の調査に使用した質問票を参考に作成した中学生版質問票を数名の中学生によるプレテストを行った後に使用した。男女交際において相手に対して行われる場合，10項目の内容に対して，それが暴力に当たると思うかを尋ねた。この質問は，暴力に当たるまたは暴力に当たらない，の二者択一で答えるものである。10項目の合計点を男女交際における暴力認知得点としている。得点は，0から10までの得点になる。

(4) 性感染症の知識

Kelly,J.Aら[22]の尺度をもとにした日本語版を使用した。その尺度は，2003年に松本と武田によって[23]，日本の文化や環境に合うように翻訳され日本の大学生・高校生を対象に使用されている。その尺度の中で特に14項目「HIV/AIDSに関する知識評価尺度」は，信頼性が高いことが証明されている（α =.67）[23]。われわれは，この尺度をもとに，13－14年歳の対象者にプレテストを実施して，14項目のうち4項目において低い正解率を示した。そのため中学生の学習指導要領の内容を確認して10項目の簡易尺度を作成した。そして，中学生に適した尺度であることを確認した（α = .69）[18]。この質問は，正誤の二者択一である。10項目の合計点を性感染症の知識得点としている。得点は，0から10までの得点になる。

(5) セルフ・エスティーム

全般的セルフ・エスティーム尺度（Rosenberg M. 1965）[24]を使用した。その尺度は，10項目から構成される。本尺度の日本語版は星野によって翻訳された（星野1970）[25]。本尺度には，疑問点も報告されているが[26]，日本の中学生・高校生の危険行動調査や性行動に関連する調査において，近年もよく用いられていることを考慮して使用した[27-29]。答えは，1＝非常に同意する，2＝同意する，3＝同意しないと4＝まったく同意しない，の4項目より選択させた。10項目の合計点をセルフ・エスティーム得点としている。得点は，10から50までの得点になる。

(6) 男女交際の意識

独自に作成した3項目の質問票を使用した。①男女交際において男女の対等な関係は，どの程度大切であると思いますか？ ②男女交際において相手を思いやることは，どの程度大切であると思いますか？ ③男女交際において自分を思いやることは，どの程度大切であると思いますか？ の質問に対して，1＝大切でない，2＝あまり大切でない，3＝少し大切である，4＝大切である，から選択する。大切に考える程度が高くなるほど，点数を高く設定している。

(7) 性行為の意識

① 中学生時の性行為に対する現在の意識

独自に作成した質問票を使用した。“あなたは，あなた自身が中学生の時に，性行為をすることをどう考えていますか？”この質問に対して，1＝かまわない，2＝少しはかまわない，3＝よくない，4＝あまりよくない，のいずれかで答えるものである。中学生時の性行為を拒否しているほど，点数を高く設定している。

② 高校生時の性行為に対する将来の意識

独自に作成した質問票を使用した。“あなたは，

あなた自身が高校生の時に，性行為をすることをどう考えていますか？”この質問に対して，1＝かまわない，2＝少しはかまわない，3＝よくない，4＝あまりよくない，のいずれかで答えるものである。高校生時の性行為を拒否しているほど，点数を高く設定している。

③ 性行為を誘われた時に拒否する意識

独自に作成した質問票を使用した。“あなたは，性行為をすることを誘われた時に，ことわる自信がありますか？”この質問に対して，1＝自信がある，2＝少しは自信がある，3＝あまり自信がない，4＝，自信がない，のいずれかで答えるものである。性行為を誘われた時に拒否する自信があるほど点数を高く設定している。

(8) 危険行動（飲酒，喫煙，性行動）

危険行動の経験に対して，飲酒，喫煙，性行動について調査した。“この3カ月間，お酒を飲んだ経験がありましたか？”，“この3カ月間，タバコを吸った経験がありましたか？”“この3カ月間，性行為の経験がありましたか？”，“今までに，性行為の経験がありましたか？”この質問に経験がないか経験があるかを尋ねた。

4. 分析方法

親・教員との会話頻度，男女交際の意識，性行為の意識はMann-WhitneyのU検定にて，男女交際中の暴力認知，性感染症の知識，セルフ・エスティームをt検定にて，危険行動をχ^2検定にて男女を比較した。また，男女交際中の各暴力認知項目と性感染症の知識項目の男女比較はχ^2検定を使用した。

さらに，親・教員との会話頻度と男女交際および性感染症に関する知識・意識・行動との関連を検討するために，親・教員との会話頻度，男女交際の意識，性行為の意識の各データを等間隔と仮定して点数化し，データの解析に使用した。説明変数を親・教員との各会話頻度とし，目的変数として男女交際中の暴力認知，性感染症の知識，セルフ・エスティーム，男女交際の意識，性行為の意識を重回帰分析にて，危険行動をロジステック回帰分析にて分析した。検定には，SPSS（Statistical Package for the Social Science）19.0を使用した。有意差は，$p < 0.05$に設定した。

Ⅲ. 結　果

1. 対象者の属性

予防教育の事前調査を完了した2･3年生は，1541人（回収率88.2％）であった。2年生は667人，3年生は874人であった。男子は817人（53.0％），女子は724人（47.0％）であった。対象者の平均年齢は，男子13.9（±0.67）歳で，女子13.9（±0.78）で男女間に有意差はなかった。1541人の回答結果を用いて，男女で各変数を比較した結果を**表1**に示す。

2. 中学生男女の親・教員との会話頻度

保護者との会話頻度に関して，「日常会話」，「命の大切さについて話す」，「健康の大切さについて話す」，「生徒の意見を聞く」という項目を男女で比較した結果，すべての項目で男子より女子の頻度が有意に高いことが認められた（$p < 0.001$）。教員との会話頻度は，「日常会話」（$p = 0.027$），「命の大切さについて話す」（$p < 0.001$），「健康の大切さについて話す」（$p < 0.001$）の項目で男子より女子の頻度が有意に高いことが認められた。「生徒の意見を聞く」は男女間で有意差がなかった。これらの結果より，全体的に男子の方が女子より周囲の大人との会話頻度が低いことが明らかとなった。

3. 中学生男女の男女交際に関する暴力認知と性感染症の知識

男女交際中の暴力認知合計得点の平均は，男子7.2±2.5点，女子7.1±2.3点で有意な差を認めなかった。しかし，暴力の内容により認知に男女差を示した（**表2**）。「けがをしない程度に，たたいたり，けったりする」という身体的暴力を暴力だと認知している男子は，女子より高かった（$p < 0.001$）。しかし，「突き飛ばしたり，ものを投げつけたりする」，「大声で怒鳴る」，「監視したり，外出させなかったりして行動の自由を奪う」など精神的暴力について暴力と認知している男子は，女子より少なかった。一方，「他の異性と話をしたり，親しげにしたりすることを怒る」について暴力と認知している生徒は，男女ともに少なく，

表1　親・教員との会話頻度と男女交際及び性感染症に関する知識・意識・行動の中学生男女比較
男子（n =817）　女子（n =724）

3カ月間の親との会話頻度 (%)		1. 全く話さない	2. ほとんど話さない	3. たまに話す	4. よく話す	p
日常会話	男	0.7	3.7	30.2	65.4	<0.001
	女	0	1.4	16.3	82.3	
命の大切さを話す	男	55.5	32.6	10.6	1.4	<0.001
	女	39.6	40.7	18.3	1.4	
健康の大切さを話す	男	37.1	31.6	25.8	5.4	<0.001
	女	25.2	34.9	35.0	4.8	
		1. 全く聞かない	2. ほとんど聞かない	3. たまに聞く	4. よく聞く	
子どもの意見を聞く	男	4.7	11.8	50.5	32.9	<0.001
	女	2.8	7.2	44.2	45.8	
3カ月間の教員との会話頻度 (%)		1. 全く話さない	2. ほとんど話さない	3. たまに話す	4. よく話す	
日常会話	男	2.8	15.1	53.1	29.0	0.027
	女	1.5	13.7	51.0	33.8	
命の大切さを話す	男	42.6	38.5	16.6	2.4	<0.001
	女	30.9	42.1	23.1	3.9	
健康の大切さを話す	男	37.3	38.9	21.2	2.6	<0.001
	女	26.0	41.8	28.8	3.4	
		1. 全く聞かない	2. ほとんど聞かない	3. たまに聞く	4. よく聞く	
生徒の意見を聞く	男	7.0	14.8	52.5	25.7	0.885
	女	5.0	17.0	52.4	25.6	
男女交際中の暴力認知　M±SD	男	7.2 ± 2.5				0.523
	女	7.1 ± 2.3				
性感染症の知識　M±SD	男	6.3 ± 2.0				0.094
	女	6.5 ± 2.1				
セルフ・エスティーム　M±SD	男	25.5 ± 4.5				<0.001
	女	23.8 ± 4.6				
男女交際の意識 (%)		1. 大切でない	2. あまり大切でない	3. 少し大切である	4. 大切である	p
男女の対等な関係	男	0.8	6.6	38.9	53.7	<0.001
	女	0.6	3.4	33.9	62.1	
相手を思いやる	男	0.5	3.4	26.8	69.3	<0.001
	女	0.1	1.5	16.2	82.1	
自分を思いやる	男	1.0	13.5	55.2	30.2	<0.001
	女	0.4	4.9	46.6	48.1	
性行為の意識 (%)		1. かまわない	2. 少しはかまわない	3. あまりよくない	4. よくない	p
中学生時の性行為を拒否する意識	男	9.2	15.2	39.1	36.4	0.030
	女	4.8	15.4	39.5	40.3	
高校生時の性行為を拒否する意識	男	14.9	22.8	35.2	27.1	0.234
	女	12.9	29.3	33.3	24.5	
性行為を誘われた時に拒否する意識	男	6.9	20.6	38.1	34.4	0.653
	女	5.4	20.9	38.1	34.4	
3カ月間の飲酒 (%)	男	16.4				0.726
	女	15.7				
3カ月間の喫煙 (%)	男	2.7				0.399
	女	2.0				
3カ月間の性行為 (%)	男	2.4				0.128
	女	1.3				
これまでの性行為経験 (%)	男	3.7				0.669
	女	3.2				

親・教員との会話頻度、男女交際の意識、性行為の意識はMann-Whitney の U 検定、男女交際中の暴力認知、性感染症の知識、Self-esteem を t 検定にて、危険行動は χ^2 検定にて男女差を分析　M ± SD：平均値 ± 標準偏差

表2　男女交際中の暴力認知項目の中学生男女比較　(n=1541)

	男子 (%)	女子 (%)	p
1）たたいたりして，けがをさせる	93.9	94.7	0.51
2）けがをしない程度に，たたいたり，けったりする	80.1	71.2	<0.001
3）突き飛ばしたり，ものを投げつけたりする	91.6	94.4	0.044
4）ものをこわしたり，なぐるふりをする	65.7	65.6	1.000
5）大声でどなる	45.8	55.5	<0.001
6）バカにしたり，心が傷つくようなことを言う	82.4	79.4	0.166
7）何を言っても，相手にせず無視する	58.3	58.8	0.874
8）監視したり，外出させなかったりして行動の自由を奪う	79.7	88.2	<0.001
9）性行為やキスを断われなくする	75.3	76.9	0.501
10）他の異性と話をしたり，親しげにしたりすることを怒る	53.6	39.0	<0.001

χ^2検定にて男女差を分析

表3　性感染症の知識項目の中学生男女比較　(n=1541)

	男子 (%)	女子 (%)	p
1）エイズウィルスは，健康な皮膚に入り込まない	41.0	34.5	0.015
2）せきでエイズウィルスは感染する。	64.0	68.1	0.114
3）性行為は，エイズウィルス感染の危険がある	79.8	85.4	0.008
4）性について不潔な感じのする人を相手として選ばなければ，感染を予防できる	78.8	88.5	< 0.001
5）決まった一人の性的な相手であれば感染の心配はない	79.5	86.9	< 0.001
6）感染経路には，①輸血，②性的な行為，③出産の3つがある	71.2	80.3	< 0.001
7）性器やその周辺に異常がなければ感染の心配はない	71.0	75.2	0.100
8）性行為でコンドームを使えば，完璧に感染しない"	66.2	78.5	< 0.001
9）エイズウィルスに感染してもエイズの症状がでるまでの期間は長く，人によって異なるが，だいたい5～15年(平均15年）である	62.4	59.8	0.355
10）治療薬の進歩で，エイズウィルスに感染してから，エイズの症状がでるまでの期間を遅らせられるようになった	62.2	60.9	0.642

χ^2検定にて男女差を分析

女子は，男子より暴力と認知していないことが認められた（$p < 0.001$）。性感染症の知識得点の平均は，男子で6.3 ± 2.0点，女子で6.5 ± 2.1点と男女で有意な差を認めなかった。しかし，性感染症の内容により知識に男女差を示した（表3）。「エイズウィルスは，健康な皮膚に入り込まない」は，女子より男子で正解率が高かった（$p = 0.015$）。「性について不潔な感じのする人を相手として選ばなければ，感染を予防できる」，「決まった一人の性的な相手であれば感染の心配はない」，「感染経路には，①輸血，②性的な行為，③出産の3つがある」，「性行為でコンドームを使えば，完璧に感染しない」は，男子より女子で正解率が高かった（$p < 0.001$）。

4. 中学生男女の意識

セルフ・エスティーム得点の平均は，男子で25.5 ± 4.5点，女子で23.8 ± 4.6点と女子より男子が高い。男女交際において，「男女の対等な関係」，「相手を思いやる」，「自分を思いやる」を大切であるという意識は，すべてにおいて女子が男子より多かった（$p < 0.001$）。また，現在の自分自身について中学生の性行為を「よくない」と拒否している男子は女子より少なく，「かまわない」と容認している男子が女子より多いことが認められた（$p < 0.05$）。高校生時の性行為を拒否する意識や性行為を誘われた時に拒否する意識は，男女間で有意な差を認めなかった。

5. 中学生男女の危険行動

中学生の危険行動として，過去3カ月間の飲酒経験は，男子16.4％，女子15.7％であった。過去3カ月間の喫煙経験は，男子2.7％，女子2.0％であった。過去3カ月間の性行為経験は，男子2.4%,

表4　中学生男子の親・教員との会話頻度と男女交際及び性感染症に関する知識・意識・行動との関連（n =817）

	過去3カ月間の親との会話頻度				過去3カ月間の教員との会話頻度			
	日常会話 β	命の大切さ β	健康の大切さ β	意見を聞く β	日常会話 β	命の大切さ β	健康の大切さ β	意見を聞く β
男女交際中の暴力認知 (R2＝0.019)	0.060	0.014	-0.080	0.107	0.069	-0.070	0.079	0.004
性感染症の知識 (R2＝-0.007)	0.008	-0.024	-0.031	0.034	-0.016	-0.058	0.039	0.004
セルフ・エスティーム (R2＝0.067)	0.017	0.016	0.141**	0.143***	0.045	-0.041	-0.02	0.058
男女交際の意識								
男女の対等な関係 (R2＝0.047)	0.003	-0.033	0.000	0.122**	0.186***	-0.066	0.069	-0.007
相手を思いやる (R2＝0.046)	0.065	0.002	-0.005	0.083*	0.128**	-0.067	0.080	0.044
自分を思いやる (R2＝0.020)	0.101*	-0.019	-0.049	0.061	0.031	0.010	0.087	0.018
性行為の意識								
中学生時の性行為を拒否する意識 (R2＝0.041)	0.063	0.066	-0.089	0.082	-0.080	0.026	-0.038	0.178***
高校生時の性行為を拒否する意識 (R2＝0.029)	0.062	0.076	-0.052	0.054	0.099	0.042	-0.055	0.150***
性行為を誘われた時に拒否する意識 (R2＝0.002)	0.096*	0.009	-0.033	-0.018	0.003	-0.033	-0.02	0.058
危険行動	OR (95%CI)	OR (95%CI)	OR (95%CI)	OR (95%CI)	OR (95%CI)	OR (95%CI)	OR (95%CI)	OR (95%CI)
3カ月間の飲酒 (%)	0.925 (0.64-1.33)	0.831 (0.58-1.17)	1.088 (0.81-1.17)	0.966 (0.72-1.29)	1.044 (0.77-1.40)	1.007 (0.68-1.47)	1.331 (0.90-1.95)	0.807 (0.61-1.06)
3カ月間の喫煙 (%)	0.909 (044.-1.85)	0.764 (0.34-1.69)	1.112 (0.57-2.13)	0.592 (0.32-1.08)	0.836 (0.44-1.58)	1.385 (0.61-3.11)	1.856 (0.81-4.24)	0.684 (0.36-1.26)
3カ月間の性行為 (%)	1.087 (0.44-2.68)	1.932 (0.86-4.31)	1.008 (0.48-2.07)	1.368 (0.67-2.77)	1.036 (0.52-4.25)	1.503 (0.53-4.25)	0.662 (0.22-1.95)	0.380** (0.19-0.73)
これまでの性行為経験 (%)	0.906 (0.44-1.83)	2.090 (0.99-3.98)	0.987 (0.53-1.83)	0.864 (0.48-1.54)	0.952 (0.52-1.72)	1.055 (0.48-2.29)	1.170 (0.54-2.53)	0.656 (0.37-1.16)

説明変数を親・教員との各会話頻度とし、目的変数として男女交際中の暴力認知、性感染症の知識、セルフ・エスティーム、男女交際の意識、性行為の意識を重回帰分析にて、危険行動をロジステック回帰分析にて分析
R2：調整済み R2 乗　β：標準化係数　OR：オッズ比　CI：オッズ比の信頼区間　*<0.05　**＜0.01　***＜0.001

女子1.3％で，今までの性行為経験は男子3.7％，女子3.2％と何れも男女間で有意差はなかった。

6. 中学生男子の親・教員との会話頻度と男女交際および性感染症に関する知識・意識・行動との関連（表4）

親との会話頻度に関して，「日常会話」は，自分を思いやることや性行為と誘われた時に拒否する意識に影響していた。「命の大切さについて話す」は，生徒の知識・意識・行動に関連を示さなかった。「健康の大切さについて話す」は，セルフ・エスティームを高めることに関係していた。さらに，「子どもの意見を聞く」は，セルフ・エスティームを高め，男女の対等な関係や相手を思いやることに影響していた。

教員との会話頻度に関して，「日常会話」は，男女の対等な関係や相手を思いやることに影響していた。「命の大切さについて話す」や「健康の大切さについて話す」は，生徒の知識・意識・行動に関連を示さなかった。しかし，「生徒の意見を聞く」は，中学生・高校生時の性行為を拒否する意識や過去3カ月間の性行為を減少させることに関係していた。

7. 中学生女子の親・教員との会話頻度と男女交際および性感染症に関する知識・意識・行動との関連（表5）

親との会話頻度に関して，「日常会話」は，セルフ・エスティームを高め，過去3カ月間の喫煙経験を低下させることに影響していた。「命の大切さについて話す」や「健康の大切さについて話す」は，生徒の知識・意識・行動に関連を示さなかった。しかし，「子どもの意見を聞く」は，セルフ・エスティームを高め，過去3カ月間の性行

表5　中学生女子の親・教員との会話頻度と男女交際及び性感染症に関する知識・意識・行動との関連（n =724）

	過去3カ月間の親との会話頻度				過去3カ月間の教員との会話頻度			
	日常会話 β	命の大切さ β	健康の大切さ β	意見を聞く β	日常会話 β	命の大切さ β	健康の大切さ β	意見を聞く β
男女交際中の暴力認知（R2＝0.001）	0.007	0.076	-0.035	-0.018	0.056	0.003	-0.022	0.06
性感染症の知識（R2＝0.010）	0.035	-0.019	0.038	-0.050	0.136**	0.034	0.001	-0.03
セルフ・エスティーム（R2＝0.077）	0.103*	-0.028	0.067	0.148***	0.043	0.107	-0.094	0.080
男女交際の意識								
男女の対等な関係（R2＝0.001）	0.015	-0.038	0.044	0.000	0.061	0.009	0.056	-0.013
相手を思いやる（R2＝0.006）	-0.019	-0.046	0.046	0.025	0.092*	0.054	-0.003	0.012
自分を思いやる（R2＝0.035）	0.008	0.048	-0.019	0.052	0.007	0.141*	-0.072	0.131**
性行為の意識								
中学生時の性行為を拒否する意識（R2＝0.015）	0.057	0.062	0.016	0.088	-0.017	-0.058	0.025	0.027
高校生時の性行為を拒否する意識（R2＝0.007）	0.021	0.073	0.012	0.070	-0.080	-0.032	0.023	0.021
性行為を誘われた時に拒否する意識（R2＝0.002）	0.006	-0.110	0.105	0.026	0.023	0.015	-0.009	0.052
危険行動	OR (95%CI)	OR (95%CI)	OR (95%CI)	OR (95%CI)	OR (95%CI)	OR (95%CI)	OR (95%CI)	OR (95%CI)
3カ月間の飲酒 (%)	0.849 (0.51-1.41)	0.882 (0.60-1.28)	0.971 (0.69-1.36)	0.846 (0.60-1.17)	1.13 (0.80-1.59)	1.01 (0.66-1.53)	1.217 (0.78-1.87)	0.841 (0.61-1.14)
3カ月間の喫煙 (%)	0.272** (0.10-0.72)	0.614 (0.19-1.91)	1.767 (0.70-4.42)	0.345** (0.15-0.75)	1.172 (0.44-3.07)	1.186 (0.38-3.07)	1.401 (0.46-4.24)	0.588 (0.26-1.29)
3カ月間の性行為 (%)	0.525 (0.15-1.82)	0.715 (0.20-2.53)	1.573 (0.52-4.68)	0.389* (0.15-0.99)	0.627 (0.21-1.84)	0.752 (0.19-2.88)	1.749 (0.48-6.33)	0.917 (0.36-2.32)
これまでの性行為経験 (%)	0.515 (0.20-1.27)	1.142 (0.50-2.56)	1.110 (0.52-2.15)	0.353*** (0.18-0.66)	1.045 (0.50-2.15)	1.204 (0.511-2.15)	1.299 (0.53-3.17)	0.800 (0.41-1.52)

説明変数を親・教員との各会話頻度とし、目的変数として男女交際中の暴力認知、性感染症の知識、セルフ・エスティーム、男女交際の意識、性行為の意識を重回帰分析にて、危険行動をロジステック回帰分析にて分析
R2：調整済みR2乗　β：標準化係数　OR：オッズ比　CI：オッズ比の信頼区間　*<0.05　**<0.01　***<0.001

為経験や過去の性行為経験を減らすことに関係していた。

教員との会話頻度に関して，「日常会話」は，性感染症の知識を高め，男女交際において相手を思いやることに影響していた。「命の大切さについて話すこと」は，男女交際において自分を思いやることに関係していた。「健康の大切さについて話す」は，生徒の知識・意識・行動に関連を示さなかった。「生徒の意見を聞く」は，男女交際において自分を思いやることに関係していた。

Ⅳ．考　察

1．男女交際や性感染症に関する知識・意識・行動

男女交際中の暴力の認知合計得点においては，男女差を認めなかったが，暴力の種類によって男女で認知の差を認めた。身体的な暴力は，男女ともに高い認知であったが，精神的暴力や性的暴力についての認知は，男女ともに低い。精神的な暴力の中で，突き飛ばしたり，ものを投げつけたり，大声でどなったりすることで相手を脅し，支配・服従させる暴力を女子よりも男子が暴力と認知している割合が低いことは，交際を開始した時にDVにつながる可能性があることが示唆される。一方，女子も他の異性と話をしたり，親しげにしたりすることを怒るといった束縛することを暴力だと認知している割合が低いことは，男女間のトラブルに発展していく可能性があると考えられる。富安らの青年期男女のデートバイオレンスに関する認識と性差間の相違をみる調査によると，男女ともに「身体･心理的暴力」は高い認識を示していたが，「支配･服従的暴力」は男女ともに低

い傾向で，「性的暴力」は女子より男子で低い認知にいたっているなど項目によって有意な差を認めていた[30]。DVの種類や内容によって認知が男女で異なるため，性差を考慮した予防教育を行うことが必要である。さらに，男女交際における意識として，「男女の対等な関係」，「相手を思いやる」，「自分を思いやる」のいずれも女子より男子が尊重する意識が低いことは，男女関係において問題を生じる可能性がある。男女ともに対等で尊重される個人であることを学習することが必要であると考える。

性感染症に関係する知識得点は，男女で有意な差を認めなかったが，中学生の性行為を容認している男子は女子より高いことが認められた。

全国中学生を対象にランダムに調査された男女の性的な関心において，男子は，身体的な成長が著明になる中学生の頃から性的な欲求が生じ，性的関心が高まるが，中学生において性的な欲求が少ない女子は男子より性的な関心が低いことが報告されている[2]。男子中学生は，より性的関心が強いため，発達とともに性行動を容認する生徒が増えていくことが考えられる。性行動に伴う危険やDVについての予防教育の機会を増やし，個別相談を加えることによって，性行動を慎重に考え，性行為を早期に開始する生徒が増加しない取り組みが必要であると考える。

2. 中学生の親・教員との会話頻度と男女交際および性感染症に関する知識・意識・行動との関連

親・教員との会話頻度，男女交際および性感染症に関する知識・意識・行動は，男女で異なる傾向を示した。それらの関連についても異なる傾向を認めた。男子において，保護者との「日常会話」，「健康の大切さについて話す」，「子どもの意見を聞く」ことは，セルフ・エスティームを高め，男女交際の意識に良い影響を与えていた。一方，女子において，保護者との「日常会話」，「生徒の意見を聞く」ことは，セルフ・エスティームを高め，過去3カ月間の喫煙・性行動や過去の性行動を低下させることに関係していた。

思春期になると，同年代の仲間との会話が多くなり，親との会話頻度は減る。中学生の子どもをもつ両親と子どもとの会話についての河内らの調査によると，子どもとの会話があると答えた親は，「日常生活について」が48％と最も多く，子どもから体や心の相談があった割合が多いが，「性について」は，2.7%と少ないことを報告した[31]。小学5・6年生と中学生，およびその保護者，小中学校の教員を対象に性に関する親子の会話の調査結果は，子どもは学年が上がるにつれ家族と性に関する話をしなくなり，特に男子にその傾向が顕著であったと報告している[32]。中学生の親を対象に，親子の性に関する会話と二次性徴発現時の子どもへのかかわりについての調査により，女子の初経時に比べて男子の精通現象時の親のかかわりが顕著に少ないことを報告している[14]。本研究において，親との会話は，女子より男子が少ないことを示し，「命」や「健康」についても，女子より男子において，親との会話頻度が少ないことが認められた。性的な話題は，日本の文化的な背景から，特別な話題であるととらえられているため，親子で会話を行う頻度は少ないという他の研究結果と一致する[33]。武富らは，新大学生の保護者の調査において，親が子どもと快適に話せる話題は，身体の成長・発達と妊娠で，18歳までに，HIV/エイズ，性行為や避妊の教育は家庭で行われていないと報告している[34]。日本では，親子間や異性間の会話の中で，性的な関係については不快な話題としてとらえられているため，親子間の性に対するコミュニケーションは，否定的な見方がある。平岡は，中学生と親との間で，性行為に対する容認度について世代間の違いがあることを明らかにした[35]。日本では，親が性の話題を持ち出すには，タブー視される傾向がある。そのため，親は，青年に対して性の話題を話しにくい文化的背景があると考えられる。男子中学生と保護者の「健康」についての会話によってセルフ・エスティームに影響していることと女子中学生と教員の「命」についての会話によって男女交際の自分を思いやる意識に関係することを示した。また，保護者や教員と「日常会話」や「生徒の意見を聞く」ことは，中学生男女の知識・意識・行動にさまざまに良い

影響を示すことが明らかとなった。身近な大人と毎日の会話から大人からモラルを伝える機会をもち，生徒が意見を聞いてもらっているという自分の存在に対して安心感や満足感をもつことで，子どもが無謀な危険行動を予防することにつながると考える。今後，親の協力を得て，生徒との会話を増やし，生徒の意見や悩みを傾聴する姿勢を尊重し，子ども自らが安全な行動を選択する教育を継続して行う機会を作ることが必要であると考える。

学校での教員との会話においても女子より男子は少ないことを示した。特に，性に関する話題について親子で話すことは日本で難しい状況から，学校教育の中で，男女の会話の特徴を理解したうえで，男子への意図したかかわりを行っていく必要がある。また，日本の調査は，相談する者がいる青年は，相談する者がいない青年より高い自己肯定感があることを示した[21]。本調査においても，教員との「日常会話」や「生徒の意見を聞く」ことが性行為を拒否する意識を高め，過去3カ月間の性行動を低下させることに関係していた。また，女子では，教員との「日常会話」，「命の大切さについて話す」，「生徒の意見を聞く」は，性感染症の知識や男女交際の意識に良い影響を与えていることが示唆された。教員と身近な話題について会話を持つことができる関係性の強化をはかることが必要である。さらに，集団教育に加えて，彼らの性や男女関係などの悩みを聞く個別相談を学校と医療・保健に関係する専門家が連携して実施することが重要であると考える。

研究の限界

国中のランダムなデータによる調査を実施していないため，佐賀県の地域性が出ている可能性がある。将来の調査は，より詳細なデータの収集を拡大する必要がある。

結　論

家族や中学校の教員との会話の頻度は，女子より男子が少なかった。男女交際において「男女の対等な関係」，「相手を思いやること」，「自分を思いやること」を大切であるという意識は，女子より男子が有意に低かった。また，中学生時の性行為を容認する意識をもつ生徒は，女子より男子が多かった。男女交際中の暴力の内容によって男女で認知の違いが認められた。さらに，親・教員が「日常会話」や「生徒の意見を聞く」ことは，中学生男女の知識・意識・行動に良い影響を与えていることが明らかとなった。今後，親や教員との日常会話を増やし，生徒の意見を傾聴する個別相談に対応する取り組みが重要であることが示唆された。

この佐賀県予防教育事業実施前の調査にご参加いただいた中学校の生徒，保護者，教員の皆様と事業実施準備にご尽力いただいた関係者に深く感謝致します。

文　献

1) Fulkerson, J.A., Story, M., Mellin, A., Leffert, N., Neumark-Sztainer, D., & French, S.A. Family dinner meal frequency and adolescent development: relationships with developmental assets and high-risk behaviors, Journal of Adolescent Health, 39, 337-345, 2006.
2) 財団法人日本性教育協会編集：「若者の性」白書第6回青少年の性行動全国調査報告，23-48，小学館，東京，2007.
3) 母子衛生研究会編集：母子保健の主なる統計，母子保健事業団発行，東京，2010.
4) 厚生労働省エイズ動向委員会：平成20年エイズ発生動向年報. http://www.api-net.jfap.or.jp/htmls/frameset-03-02.html
5) 松田悠史：デートDV加害者の認識と実態，看護教育，49，718-722，2008.
6) 畑下博世,上間美穂,但馬直子,菱田知代：デートDV文献レビュー保健師ジャーナル，61，1077-1083，2005.
7) 富安俊子，鈴井江三子：ドメスティック・バイオレンスとデートDVの相違および支援体制の課題，川崎医療福祉学会誌，18(1) 65-74，2008.
8) 内閣府：男女間における暴力に関する調査報告書，内閣府男女共同参画局，2008.
9) 中田慶子：デートDVを知っていますか？若者たちのデートDVと防止教育について,助産雑誌，61(1)，54-59，2007.

10) 鈴木ひとみ，畑下博世，川井八重，福井香代子，植村直子，笠松隆洋：高校生の対人関係形成に影響する要因の検討―デートDVの潜在性との関連,滋賀医科大学看護ジャーナル, 7(1), 51-56, 2009.
11) Jaccard, J., Dittus, P.J., Gordon, V.V. Maternal correlates of adolescent sexual and contraceptive behavior, Family planning perspectives, 28(4), 159-165. 1996.
12) Miller, K.S., Forehand, R., Kotchik, B.A. Adolescent sexual behavior in two ethnic minority samples: the role of family variables, Journal of Marriage Family, 61, 85-98, 1999.
13) Meschke, L.L., Bartholomae, S., Zentall, S.R.：Adolescent Sexuality and Parent-Adolescent Processes, Promoting Healthy Teen Choices, J Adolesc Health, 31, 264-279, 2002.
14) 齋藤益子，木村好秀，宍戸章子:中学生をもつ親の二次性徴発現時の子どもへのかかわりおよび性に関する子どもとの会話に関する検討,思春期学，23，154-160，2005.
15) 永松美雪，尾崎岩太，武富弥栄子，佐藤武：思春期の子どもをもつ親へのHIVと性に関するプログラムの実態，日本エイズ学会，9(2): 158-166，2007.
16) 宍戸章子，齋藤益子，木村好秀:わが国の家庭での性教育に関する研究の動向と今後の課題，思春期学，25，337-349，2007.
17) Nagamatsu M, Saito H, Sato T.: Factors associated with gender differences in parent-adolescent relationships that delay first intercourse in Japan, J Sch Health, 78:601-606, 2008.
18) Nagamatsu M, Sato T, Nakagawa A, Saito H.: HIV prevention through extended education encompassing students, parents, and teachers in Japan, Environmental Health and Preventive Medicine, 16, online 2011 January.
19) Salazar LF, Crosby RA, Diclemente RJ, Wingood GM, lescano CM, Brown LK.: Self-esteem and theoretical mediators of safer sex among African American female adolescents: implication for sexual risk reduction interventions. Health Edu and Behav, 32, 413-427, 2005.
20) Denny G, Young M.: An evaluation of an abstinence–only education curriculum: An 18-month follow-up, J Sch Health, 76, 414-422, 2006.
21) 倉田真由美：高校生・大学生の相談状況と自己肯定感との関係，思春期, 26(2), 257-260, 2008.
22) Kelly JA, St Lawrence JS, Hood HV, Brasfield TL. An objective test of AIDS risk behavior knowledge: Scale development, validation, and norms. J Behav Ther and Exp Psychiatry, 20, 227-234, 1989.
23) 松本純子，武田敏：介入アプローチの差によるHIV感染予防行動における自己効力感の比較，思春期学，21(4), 379-387, 2003.
24) Rosenberg M. Society and adolescent self-image. Princeton University. Princeton, New Jersey Publication, 1965.
25) 星野命: 感情と心理と教育（二），児童心理，24，1264-1283, 1445-1477, 1970.
26) 樋口義之，松浦賢長：自己肯定感の構成概念及び自己肯定感尺度の作成に関する研究，母性衛生，43(4), 500-504，2002.
27) 山本和代：子どもたちの問題行動と関連要因について　対教師・友人関係の視点からの分析，看護・保健科学研究誌，6(2)，85-94，2006.
28) 川畑徹郎，石川哲也，勝野眞吾，西岡伸紀，野津有司，島井哲志，春木敏：中・高校生の性行動の実態とその関連要因―セルフエスティームを含む心理社会的変数に焦点を当てて―学校保健研究，49，335-347，2007.
29) 富岡美佳：中学生を対象としたライフスキルトレーニングを用いた性教育プログラムの効果，思春期学，25(4), 436-444，2007.
30) 富安俊子，鈴井江三子：青年期男女におけるデートバイオレンスの認識と性差間の相違，母性衛生，51(4), 626-631，2011.
31) 河内浩美, 渡邊典子, 小柳恭子, 久保田美雪: 中学生の子どもをもつ両親とその子どもの会話に関する調査, 新潟青陵大学紀要, 8, 139-148, 2008.
32) 竹俣由美子, 木村留美子:思春期の子どもの性に関する研究（第1報）性に関する親子の会話と性情報の入手について，金沢大学つるま保健学会誌,34,79-90,2010.
33) 町浦美智子，本間祐子：性・セクシュアリティに関するコミュニケーションの実態，海外の文献を中心に，思春期学，22(2)：248-253，　2004.
34) 武富弥栄子，尾崎岩太，山田茂人，浜野香苗，井上悦子，佐野雅之，只野寿太郎：大学生の保護者のHIV/STDに関する意識調査，日本エイズ学会誌，5(2)：76-81，2003.
35) 平岡友良：中学生・高校生・短大生・父母における性および性教育に関する意識調査，思春期，23(1):161-170, 2005

（受付：平成23年4月1日
受理：平成24年2月10日）